

人権ほつと三年十月号

「2つの異なるメッセージ」

大阪教育大学名誉教授

堀 薫夫

2021年のメディア報道では、ある意味反対方向を向くようなメッセージが頻繁に流された。いうまでもなく、「コロナ禍」に関する報道と「オリンピック開催」に関する報道である。

人権問題との絡みで前者のメッセージを読むならば、医療従事者、コロナ患者、エッセンシャル・ワーカーなどへの、風評被害を抑え彼らの人権を尊重せよという点だろうか。他方でくり返される緊急事態宣言発動により、酒類提供者やイベント主催者などの生活はどうなるのかという側面からの人権問題も出てきているし、増え続ける自宅療養者の人権問題も深刻だといえる。

そして他方で、最大規模のイベントである東京オリンピック、パラリンピックは、無観客とはいえ開催されている。

多くの日本人アスリートの活躍に日本中が熱狂したこともまた事実であろう。そして他方で一部のアスリートに対するネットを介した海外からの中傷事件やベラルーシ陸上選手のポーランド亡命事件、ミャンマーのサッカー選手の難民認定要求、大会関係者のユダヤ人中傷解任事件も生じた。両者はともに重い人権問題を内包し、それぞれが重要な、グローバルかつ今日的な問題として生起している。しかし両者を並置してくり返し報道されるとき、違和感を覚えた人も多いのではなからうか？

英国ではサッカーのユーロ観戦で6千人以上のコロナ感染者が出ている。緊急事態宣言下のオリンピック開催を境に感染者数は急増した。2つの大きなメッセージの根っこは逆の方向を向いているのである。にもかかわらず両者は横並びのまま報道されている。個々の人権問題の根には、反対方向を向くビッグ・イシューがある。根とどう向き合うのかも忘れてはならない。